

九一式戦闘機学術調査報告・不定期連載その21
NPO法人・航空復元懇話会編（文責：横川裕一）

立川行幸と九一戦

数年前、筆者の所属する航空復元懇話会は主翼下面に「行幸記念」と銘のある九一式戦闘機のモデルを入手した。翼幅182mmの金属製モデルである。

当会では、このモデルが記念する行幸は、昭和8年5月の立川行幸だろうと考えている。

この行幸を、九一戦から振り返ってみたい。

行幸とは

ご存知のように「行幸」(ぎょうこう)とは、天皇の旅行である。戦前において現人神(あらびとがみ)の天皇を迎えることは栄誉の極みであり、それを記念した写真帖や絵葉書などが数多く製作されている。古書として見(まみ)えることも少なくない。今回のモデルもそうした流れの1つだろう。軍用機を以って記念していることから、製作者は軍関係者であることは間違いない。

一方、天皇は軍の「元帥」(軍人)であり、軍人が軍の施設を訪れても行幸とはならない。

昭和5年5月に浜松の飛行第7連隊訪問の記念碑には「駐輦」(行幸途中で車を止める)となっている。

したがって、行幸先としては飛行機メーカーなどの民間施設か、陸軍航空本部またはその隷下の官衙(軍隊ではない役所)への訪問が行幸となる。

立川の行幸も、陸軍航空本部技術部という官衙への訪問であった。

なぜ立川行幸か

九一戦がモチーフであることから、行幸先は九一戦に縁が深い地だろうことが想像される。また、旧式機を記念モデル化するとも考えにくいので、行幸の時期は九一戦が新鋭機であった昭和7～10年と推察される。

この条件を満足する行幸には、次の2つがある。

- ・昭和8年5月4日：陸軍航空本部技術部（東京府立川）
- ・昭和9年11月16日：中島飛行機株式会社（群馬県太田）

前者の立川には、飛行第5連隊と陸軍航空本部技術部（昭和3年9月に所沢から移転）があった。当時の飛行第5連隊はまだ偵察連隊であり、主力は乙式偵察機（サルムソン2A2）と八八式偵察機。九一戦装備の戦闘中隊を有するのは約3ヵ月後の8月からであるが、陸軍航空本部技術部にはすでに数

機の九一戦が配備されていた。九一戦試作機による試験はここ立川で行なわれており、前年11月の106号機の墜落事故もその1つ。九一戦とは縁が深い。

後者は、竣工なったばかりの中島飛行機太田新工場へのもので、九一戦をはじめとした陸海軍機が天覧に供されている。仮にこれを記念して中島飛行機で作成したものであれば、記念モデルに会社名が入りそうだが、入手モデルにはそれは見あたらない。加えて、中島飛行機の陸軍関係者が作成した可能性は、次の点から低いだろう。

と言うのも、行幸1ヵ月前の10月18日付で、九四式偵察機が「制式化」されている点である。天皇にも最新鋭機として説明されたりし、献上品に九四偵と見える模型付きの置時計もある。中島飛行機の陸軍関係者が行幸記念機種として選ぶのなら、九四偵になるだろう（もっとも、制式化されたの九四偵は「第二級秘密兵器」として「当分、写真撮影が禁止」であり、モデルに選ばなかったという想像もできるが…）。

以上から、本モデルは昭和8年5月の立川行幸を記念しているだろうと考える。

ただし、懸念点が残らないわけではない。主翼支柱の形状から、モデルは「1型の後期型」のようだが、その生産開始時期をまだ明確にはできていない点である。昭和8年7月下旬に命名式が催された愛国88「通運」号（東京国際通運並びに関係取引店従業員からの献納、現日本通運、写真1）は「後期型」であり、この時期の後期型の存在には違和感はないが、それを裏づける確証をまだ得ていない。



写真1. 九一式戦闘機、愛国88「通運」号。

立川行幸

昭和8年5月4日、多摩御陵への参拝の帰りに、天皇陛下は立川の陸軍航空本部技術部に立ち寄られた。

以降に、その様子を再現してみよう。

●天覧

昼前、陛下は陸軍航空本部技術部に到着、午後から兵器と飛行演習の天覧となった。兵器展示は45分、飛行演習は1時間である。飛行演目を表1に示す。

兵器天覧では、飛行器材（沿革的各種飛行機、現用各種飛行機、試製各種飛行機）、気球器材、その他（発動機、装備品、飛行場器材）が展示された。九一戦も、主力戦闘機として説明されているだろう。

ちなみに、雨天の場合には徳川好敏少将による講演が予定されており、「皇国陸軍飛行隊創設時代の回顧」という7,300字以上からなる長文であった。「臨時軍用気球研究会」から始まって、第一次世界大戦での青島攻撃、フォー



当日の様子を伝える書画（今村中佐・画、「航空写真真帖」より）。左が徳川少将。天皇の肩あたりに見える単葉機は九一戦に見えるが、残されている軍の書類では、九一戦を含め単葉機は集団離陸には参加していない。

ル大佐らフランス航空団のこと、満州事変での出動までを振り返っている。この原稿は、アジア歴史資料センターWebで見ることができる。

●機種

表1からは乙式偵察機や甲式4型戦闘機（ニューポール29）、八八式偵察機、

九二式偵察機、九二式戦闘機（写真2参照、以降は九二戦と記す）の名前が見える。が、演目・機数とも、主役は九一戦であることに注目していただきたい。また九二戦が、九一戦の敵役ではないことが興味深い。

筆者は、九二戦の制式時期は昭和7年4月下旬とみているが、制式後1年を経過しても、九二戦はこういう晴れ舞台で主役になっていない。1つの理由には、九一戦が新鋭機を思わせるパラソル単葉機に対して、九二戦は甲四型戦闘機と同じ複葉機であり、目新しさを感じさせないこともあるだろう。

加えて、飛行展示の中心は所沢や明野の飛行学校であり、この昭和8年春の時点では九二戦による教育が本格化していなかったのかもしれない。

が、この時点では手に入れ切れていない、またはまだ問題を抱えていた可能性があるようにも思える。本誌2009年6月号の記事「92式戦闘機を検証する」が、その認識の一助になれば幸いである。

●九一戦の操縦者

主役たる九一戦の操縦者には、そうそうたる顔ぶれが並んでいる。

まずは、単機特殊飛行を行なった所沢飛行学校の横山八男中尉。中尉は、昭和7年1月10日の愛国1、2号の命名式において、アクロバット展示飛行を行なった2機の九一戦操縦者の1人。後に、九一戦装備の飛行第2大隊長や

（表1） 昭和8年5月4日の立川行幸時の天覧飛行演目

演目、担当		九一戦の操縦者		
1. 編隊集団離陸 ならびに編隊集団飛行	所沢陸軍飛行学校	八八式偵察機	9機	
	飛行第五連隊	八八式偵察機	5機	
	所沢陸軍飛行学校	甲式四型戦闘機	9機	
	下志津陸軍飛行学校	甲式四型戦闘機	6機	
	明野陸軍飛行学校	甲式四型戦闘機	3機	
2. 特殊飛行	所沢陸軍飛行学校	甲式四型戦闘機	1機	陸軍航空兵中尉 横山八男 陸軍航空兵大尉 吉田直 陸軍航空兵中尉 佐藤猛夫 陸軍航空兵中尉 安藤正光
	所沢陸軍飛行学校 (単機特殊飛行)	九一式戦闘機	4機	
	(編隊特殊飛行)			
3. 空地連絡	下志津陸軍飛行学校	八八式偵察機	1機	
	飛行第五連隊	乙式一型偵察機	1機	
4. 空中戦闘	明野陸軍飛行学校	九二式偵察機	1機	陸軍航空兵大尉 三輪寛 陸軍航空兵大尉 荻田喜三郎 陸軍航空兵中尉 渡辺誠一 陸軍航空兵大尉 原田潔 陸軍航空兵中尉 加藤建夫 陸軍航空兵中尉 橋原秀見
	明野陸軍飛行学校	九二式戦闘機	3機	
	明野陸軍飛行学校 (偵察機対戦闘機)	九一式戦闘機	6機	
	(戦闘機対戦闘機)			
5. 対地攻撃	下志津陸軍飛行学校	八八式偵察機	2機	陸軍航空兵大尉 原田潔 陸軍航空兵中尉 加藤建夫 陸軍航空兵中尉 橋原秀見
	明野陸軍飛行学校	九一式戦闘機	3機	
6. 落下傘降下	陸軍航空本部技術部	八八式偵察機	2機	
7. 新式飛行機	陸軍航空本部技術部	回転翼式飛行機	1機	
		新型重爆撃機	1機	
8. 編隊群着陸	明野陸軍飛行学校	九二式戦闘機	3機	(空中戦闘の6機編隊と同一)
		九一式戦闘機	6機	



写真2. 行幸では敵役を演じた九二式戦闘機。

同隊から編成された飛行第64戦隊の2代目戦隊長を務め、陸軍航空審査部にも籍を置いた。

編隊特殊飛行における長機の吉田直大尉は、後に飛行第1戦隊(同隊は昭和13年夏まで九一戦装備の飛行連隊)の3代目戦隊長となり、三式戦装備の飛行第17、19の両戦隊を有する第22飛行団(昭和19年2月に編成)の司令となった。吉田大尉の僚機、佐藤猛夫中尉は、後の飛行第64戦隊の3代目戦隊長。

一方の明野飛行学校からは、後の飛行第16連隊長(九一戦装備)を務めた三輪寛大尉の名前が見える。僚機の渡辺誠一中尉は、後に陸軍航空審査部付。

もう一方の編隊を率いる原田潔大尉は、昭和4年8月13日、明野での実用試験中の九一戦試作機の主翼飛散事故の当人で、昭和7年2月の第1次上海事変時に明野飛行学校から派遣された九一戦4機の操縦者(4名)のうちの1人。この行幸後に飛行第5連隊へ移動となり、九一戦とは縁が深い。さらに飛行第33戦隊の2代目戦隊長、第13飛行団長となった。

その僚機の1人、加藤建夫中尉は、言わずとして知れた「加藤隼戦闘隊長」である。原田大尉と同様にこの天覧飛行の後に飛行第5連隊に配属となり、同隊から編成された飛行第2大隊の中核要員として活躍、後に飛行第64戦隊(「加藤隼戦闘隊長」の4代目戦隊長として散華した。

最後の櫛原秀見中尉も、上海事変時に派遣された操縦者(4名)のうちの

1人で、上海では九一戦(111号機)を操縦中に発動機故障から墜落事故を起こしたが、無事に帰還。後に、飛行24戦隊戦隊長(2代目)を経て、飛行第112戦隊長として終戦を迎えている。

●演目

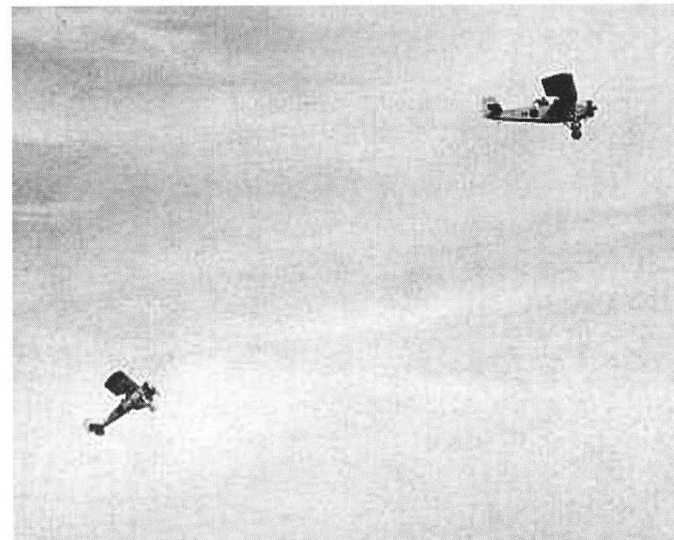
演目を概説しよう(ゴシック書体は、当時の演目名)。

まず、単機特殊飛行として、垂直降(高度1,500mから1,050mへ垂直降下)の後、急上昇で上昇しながらの横転(上昇横転)。続いて、宙返(ループ)、下方宙返(アウトサイドループの後半、頂点で半横転)、宙返反転(ループの前半、最後に半横転)、裏返飛行(背面飛行)が演じられた。九一戦は主翼燃料タンクから胴体にある燃料ポンプに重力によって燃料を供給しているため、背面飛行は短時間のみ可能である。演目の説明にも、「混合ガスの供給不良により、時々黒煙を吐く」とあり、おそらくは5~6秒にも満たない背面時間であったろう。

九一戦の後に続いて、甲式4型戦闘機(写真3)による単機特殊飛行も行



↑ 写真3. 行幸で特殊飛行を披露した甲式4型戦闘機。



← 写真4. 九二偵を下後方攻撃する九一戦(行幸と関係のない当時の絵葉書より)。

なわれた。演目は、錐もみ、宙返反転、左右横転、上昇倒転、垂直横滑で、これらは九一戦の高性能を際立たせるような演目になっているだろう。

単機特殊飛行のあとには、編隊特殊飛行が行なわれた。九一戦3機による雁行形宙返(エシュロンループ)、雁行形宙返反転、編隊宙返(デルタループ)、円周飛行(360°旋回)の4演目である。

以上が所沢飛行学校教官による九一戦の飛行性能を披露する飛行展示で、続いて明野飛行学校教官による戦闘機としての用法を示す展示が行なわれた。

まず、偵察機対戦闘機では、第1次として高度800mを直進する九二式偵察機1機に対し、高度1,000mから九一戦3機が同時に3方向から攻撃する演目が披露された。写真4は行幸時の模様ではないが、その雰囲気を感じていただけるだろう。続いて、偵察機が自由に回避運動を行なう第2次戦闘も実施された。両機種ともに新時代を感じさせる単葉(パラソル翼)機、見る人に新時代到来の鮮やかな印象を残したのではないだろうか。

次の演目は、戦闘機対戦闘機の編隊戦闘で、高度800mの九二戦3機編隊に対して、高度1,200mから九一戦3機編隊が上方攻撃を仕掛けるものである。残念ながら、どういう戦闘が繰り広げられたのか詳細は不明だが、偵察機との演目同様に九一戦側が高位という、九一戦を主役にした演目になっている。

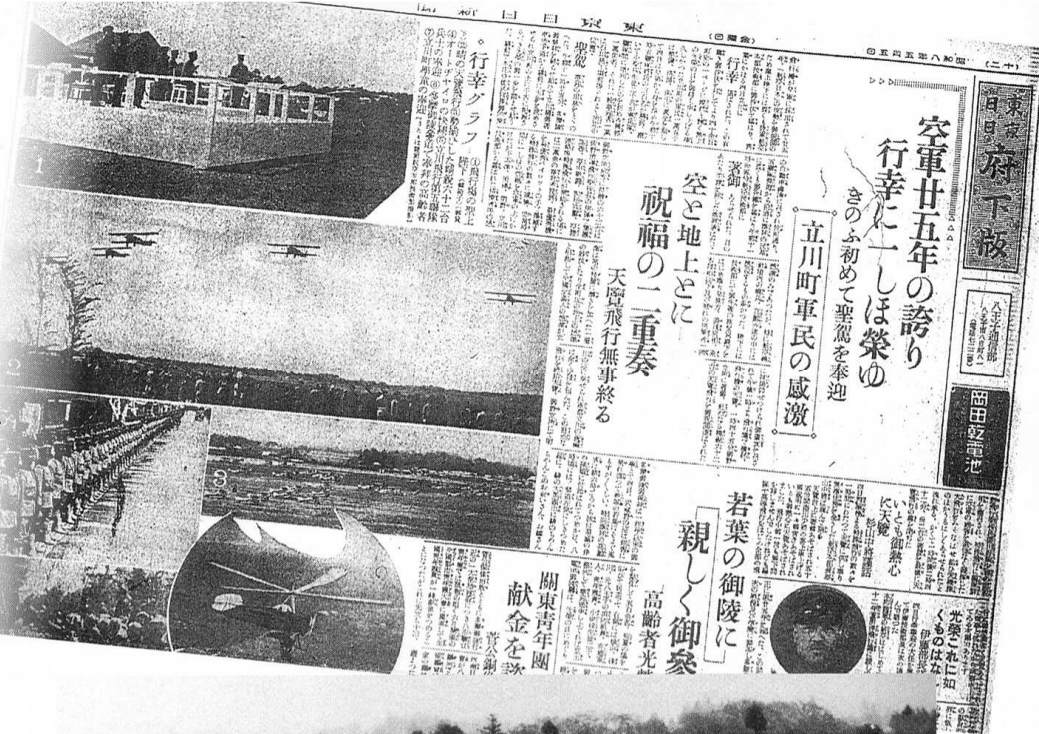
最後に、九一戦による地上攻撃展示(編隊による地上銃撃、各個による銃撃)が披露された。

なお、これら飛行展示の間、徳川少将より天皇への奏上(説明)が行なわれ、九一戦の模型を用いた解説があったとされる。三重県の陸上自衛隊明野駐屯地の航空記念館にある模型(写真5)がその際に用いられたとされている。

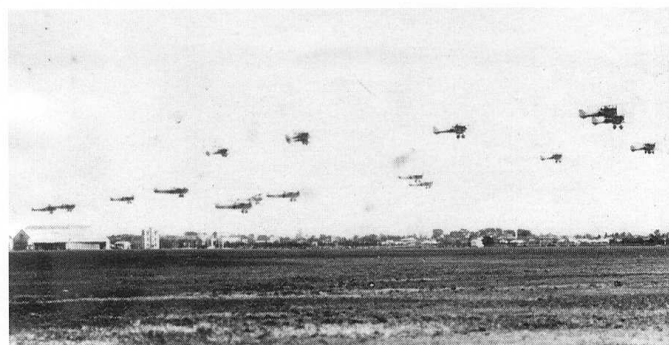
結び

前述の内容から、立川行幸における天覧飛行は九一戦が主役といっても過言ではなく、九一戦模型を以て行幸記念とすることに、不自然さは感じない。

陸自立川駐屯地には、この行幸の記念碑(写真6)がいまも残されている。



↑ 上段は、行幸の様子を伝える紙面(東京日日新聞府下版・昭和8年5月5日付)。下は、紙面にも掲載された当日の写真。九一戦は、○部分。



← 航空本部技術部側から撮影の一枚。飛行第5連隊の格納庫が左手奥に見える。



↑ 写真5. 陸上自衛隊明野駐屯地の九一戦模型。



写真6. 陸自立川駐屯地に残る行幸記念碑。